

中国語への誘い^{いざな}

国際交流室 中田雅信

2004アテネから2008北京へ

「雅典」オリンピックが絶大な盛り上がりを見せ、概ね成功裡のうちに終了しました。閉会式がそれを物語っていたと言えるでしょう。近畿大学の卒業生や在學生も競泳やアーチェリーで見事な活躍をしました。中でも、競泳の山本貴司選手は、銀（男子200mバタフライ）・銅（男子100m×4mドレイル）メダルを獲得し、中西悠子選手は銅（女子200mバタフライ）メダル、奥村幸大選手も銅（男子100m×4mドレイル）メダルをそれぞれ獲得した事は、記憶に新しいところです。私も近畿大学に所属する者として大変嬉しく思っています。さて、4年後のオリンピックは、北京で行われる事が既に決定しています。経済力が高まり、オリンピック以外にも多くの国際的な祭典が予定されている中国です。今から、中国を知り、中国語を勉強しておく、より一層楽しめるのではないのでしょうか？「雅典 ya dian」は、中国語で「アテネ」の意です。

中国語学留学時代を振り返って

1989年6月4日、中国北京でおこった天安門事件・・・その3か月後、私は中国北京に生まれて初めて足を踏み入れました。北京語言学院（現北京語言大学）に漢語進修生として1年間学ぶために戒厳令下の北京に海を越えて渡りました。たった15年ほど前の中国ですが、本格的な高度経済成長期に入った現在の中国とは比較にならないほど、当時は今よりはずっと社会主義体制の匂いが色濃く残っていました。改革開放路線のもと、劇的な変化を遂げた中国のまさに歴史的ターニングポイントに居合わせたような思いがしたものです。授業は、

月曜日から金曜日の朝8時から夕方までみっちりあり、かなりハードだった印象が残っています。そんな勉強の合間に、あるいは夜間に私が静寂を求めて通ったのは、図書館でした。中国人学生の学習態度は、真剣そのもので、まさに命懸けの形相で図書に目を向け、一心不乱に自分自身の研究活動に取り組んでいる姿を見るにつけ、中国の底力を感じたものです。今は、もうその当時の図書館は既になく、私の留学後、数年を経て今の図書館が開館しました。その後も復旦大学（上海）や北京大学（北京）で中国語のブラッシュアップを兼ねて短期間の研修に参加しました。機会あるたびごとに、時間の許す限り、各大学を訪問していますが、そのたびごとに変化し、発展していく様子は頼もしくもあると同時に一抹の寂しさも感じてしまいます。

中国語を学習するにあたって

そんな私が、中国語を学習していく中で特に重宝した図書（辞典）を幾つか紹介したいと思います。中国語辞典として日本国内でメジャーなものとしては、『中日辞典 第2版』（小学館）がありますが、ここでは、次の辞典を取り上げたいと思います。これからの学習者に少しでもお役に立つようであれば幸いです。

『中日大辞典 増訂第二版』

愛知大学中日大辞典編纂処編

大修館書店 1987年2月

我が国最初の本格的な中国語辞典と云われる愛知大学の『中日大辞典』です。出版されて35年の間に2度の改訂が行われ、発行部数

も10万部を超え、広く活用されています。この辞典は、現に中国で用いられている簡化字を含む合計8,812字を親字としています。繁体字（簡化字が簡化される前の字体2,759字）と異体字（親字と同音・同義・異形のもの、1955年12月第一批異体字整理表により廃止された1,055字を含む1,595字）もそれぞれの親字に併記され、総計13,166字を収載しています。本文2,520頁、収録項目数は、143,000語です。字体については、簡化字総表第二版（1964年5月）・印刷通用漢字字形表（1964年5月）にもとづいてすべての簡化字を新鑄しています。引き方の根本原則としては、親字も見出し語も漢語拼音字母による字音のアルファベット順に配列してあるので、求める字の字音がわかっている場合や、求める見出し語の親字の字音がわかっている場合には索引にたよらず、拼音字母によるアルファベットつづりから見当をつけてただちに本文にあたるのが便利です。ウェード式ローマ字あるいは注音字母（注音符号と呼ばれることもある）で発音を習得している場合は、発音符号対照表で拼音字母のつづりを知ることができます。字音のわからない親字や見出し語を引くときには、部首別画引き索引を用いて引きます。

（以上、本辞典凡例より）編纂されるにあたり、中国、日本双方における優秀な研究者達が誠心誠意、情熱を傾けて結実したものとして、中国語学習を進めていく上での「礎」となる事は間違いないと思われまます。また、辞典編纂において多大な貢献をされた中国科学院院長（当時）の郭沫若先生の功績は大変大きなものであり、辞典編纂所（1998年1月、処を所に改めた）に掛けられている扁額「激濁揚清」の四字は先生の筆によるものとのことで、私もぜひ一度拝見したく思っています。「激ヲ濁シテ清ヲ揚グ」とは、語彙の大海から典範たるべき詞語を採るの意とすれば、まさに辞典編纂にふさわしく、特別な思いをも汲み取る事ができる気がします。1968年2月『中日大

辞典』として刊行、我が国最初の本格的中国語辞典として評価され、第21回中日文化賞が授与されました。なお、この辞典の編纂に半世紀近く携わってこられた今泉潤太郎先生が、「増訂に際して」の中で北京語言学院の蔡振生先生らの協力に対し、感謝の意を表されています。個人的にこの辞典に親しみを覚えている点なのですが、蔡先生は私の北京語言学院留学時代の恩師（担当教員）であり、1年間しっかりと精読を通して、中国語を学びました。先生から中国語を学んだ事は、私にとってかけがえない珠玉の時間であり、私の中国語の基盤となったような気がします。またこの辞典の付録としてある日本語索引や字母対照表は非常に便利ですし、親族関係表や北京伝統住宅図解等はとても整った資料だと思います。様々な場面で役に立つものと考えられます。現在、辞典編纂所は、『中日大辞典』の新たな船出を目指して、第三版の編集に取り組んでいます。

参考：

<http://leo.aichi-u.ac.jp/~jiten/dictionary.html>

『現代漢語詞典（2002年増補本）』

中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編
商務印書館

日本の広辞苑にあたる中国で最も権威のある中中辞典とも言われています。普通語における中型の辞典で、包括字、単語、連語、熟語、成語などあわせて約56,000項目余りを収めています。この辞典は、普通語を押し広め、漢語規範化としての、字形、語形、注音、釈義等を促進するよう、努めています。一般語彙のほか、よく見られる方言語句、方言意義、ひと頃前まで使用されていた旧語句、旧意義、現在書面上でよく見られる文語語句、および一部の専門述語も掲載しています。さらに、地名、人名、姓氏等の字と現代あまり使われない字も収めています。1956年2月6日国务院發布、普通語推進の指示のもと、中国科学院語言研究所（1977年

5月より、中国社会科学院語言研究所に改称)は、1958年語彙の規範化を目的に中型の現代漢語詞典を編集確定しました。詞典編輯室は、1956年夏、資料収集に着手し、1958年初め編集を開始、1959年末に初稿完成、1960年「試印本」を印刷し、広く意見を求めました。改訂を経て、1965年「試用本」を印刷し、原稿審査のため送付しました。1973年、更に広範囲に意見を求めるため、改訂を加え、ならびに多数の読者の切実なニーズに応えるため、1965年の「試用本」の謄写版原紙を若干部印刷し、内部に発行しました。1973年「試用本」に対し、改訂を開始、「四人組」の厳しい妨害や破壊もありましたが、1977年末ついにすべての改訂を完成し、出版部門に草稿を提出しました。1978年、正式に第一版出版。1980年に一部の項目を改訂し、1983年第二版を出版しました。1993年中国社会科学院優秀科研成果賞、1994年中華人民共和國新聞出版署授与の国家図書賞を受賞しました。



現代漢語詞典

『中国語図解辞典』

興水優、大川完三郎、佐藤富士雄、依藤醇編著 大修館書店 1992年12月
中国語の絵解き百科…日常生活において目にふれる事物に重点をおき、産業・スポーツ・芸能・天体さらには動植物にいたるまで、308項目、約16,000語を絵図と結びつけて説明された本格的図解辞典です。その「まえがき」の中で、『…「百聞は一見にしかず」というが、外国語の学習では実地を歩き実物を目にすることで理解が促進される。た

とえ現場に臨めなくても、視覚的な資料の与える学習効果は計り知れない。とりわけ中国語では、わたしたち日本人の中国に対する思い込みや先入観が学習を妨げ、また中国人の日常生活に対する情報不足もそれに増幅しがちである。…』とされていますが、経験からしても、それは理に合っているものと思われます。徹底した写実的な図解により細部にわたり図示したこの辞典は、中国に行かなくても中国の言葉と事物を実感し把握できるものとも言えます。私も、初めてこれを目にした時、求めていたものに遭遇した思いでいっぱいでした。



中国語図解辞典

『基礎中国語辞典』

上野恵司著 NHK出版 2002年1月
謳い文句としては、厳選された3万語を収載、すべての用例に拼音併記、発音と文のしくみがわかるなどとなっています。親字4,600、見出し語16,000、派生語・関連語句9,600を厳選して収録しています。辞典を引き続けているうちに語学力が養われると言われますが、実際、初学者が学習するうえで、用例すべてに拼音が併記されておれば、「音」を発することもでき、会話能力を養う上でも補助的役割を果たすものと思われます。また、ローマ字の分かち書きを手掛かりに語のしくみや文の構造を知る事もできます。辞典の編纂については、見出しに親字を立て、その下位に熟語を配するという最も一般的な方法によっています。親字は1988年に中国政府が発表した《現代漢語常用字表》に収める3,500字に若干の調整を加えられてい

ます。異読字（2つ以上の読み方をもつ字）は別々に見出しを立てているため、親字の総数は4,600余字になります。《常用字表》の3,500字で現代中国語の一般的な文章の99.48%をカバーすることから、調整により、カバー率は100%近くになっているようです。著者である共立女子大学教授の上野恵司先生は、NHK中国語ラジオ講座の講師を20年余り担当され、ご活躍は周知のとおりです。私自身2002年1月に発音矯正を目的に北京の中央戯劇学院で学びましたが、その折、この研修の主催の日本中国語検定協会理事長でもある上野先生に初めてお会いし、その温厚な人柄に触れ、中国語学習の楽しさをお話し下さった事が、今でも忘れられない思い出になっています。大変感激した事は言うまでもありません。



基礎中国語辞典

出会いを大切に

話題は、変わりますが最後にこの場をお借りして私の図書館への思いを綴らせて頂きます事をお救し下さい。図書室で中学生の時は、江戸川乱歩を読み漁り、高校の時は、『水滸伝』に読み耽りました。一度習慣化すると、自然に足を運んでしまう…そして、行かないと何となく一日の生活に物足りなさを感じてしまう…私は、元来根っからの読書家というわけではないのですが、それでも地域の図書館には折をみて足を運び、旅行の際にはその地域の図書館に立ち寄るなどしています。私が、今までに図書室や図書館で出会ったすべての図書を通して、今の自分があるのは間違いありません。そういう意味では、一冊の図書と

の出会いによって、人生が大きく左右される事もあると言っても過言ではないとも思っています。本との出会いを通して、人との出会いも演出してくれるかもしれません。図書館というと、何処かしら固いイメージもあり、敷居が高く足が遠のく感も否めませんが、大学図書館も含め、老若男女を問わず気軽に、リラックスでき、知識欲を満足させてくれる、心地良い優しい空間…そんな図書館が私の理想とするところです。今回、紹介いたしました4冊の辞典は、近畿大学中央図書館にも、みなさんのすぐ手の届くところに並べられています。きっとすぐに出会えると思います。本を通して、疲弊した私をいつも助けてくれる、



また勇気づけてくれる…相田みつを氏が、その作品の中でおっしゃっています…「そのときの出逢いが」。北京オリンピックでの様々な出会いが、今から楽しみでなりません。4年も先なのに、期待でいっぱいです。

最後に、この拙文をまとめるにあたり愛知大学中日大辞典編纂所より貴重な資料をご提供頂きましたこと、ならびに辞典検索にご協力頂いた愛知大学名古屋教務課の大島秀文氏、熊本学園大学国際交流センター事務室の切通しのぶ氏、本学中央図書館事務部レファレンス課の徳山京子氏に心より感謝いたします。

主な参考文献（順不同）：

『辞源 改編本』

北京商務印書館 1951年2月

『辞海 合訂本』

中華書局 1947年3月

(中華人民共和国建国55周年の前日：

2004.9.30記)

『新華字典 修訂重排本』

北京商務印書館 1980年11月

『中日辞典 第2版』

小学館・北京商務印書館共同編集

2003年1月

『白水社 中国語辞典』

伊地智善繼編 白水社 2002年2月

『講談社 中日辞典 第二版』

相原茂編集 講談社 2002年2月

『岩波 日中辞典 第二版』

倉石武四郎・折敷瀬興編 岩波書店

2001年3月

『東方中国語辞典』

東方書店、北京・商務印書館／共同編集

相原茂、荒川清秀、大川完三郎／主編

東方書店 2004年4月

『現代中国語辞典』

香坂順一編著 光生館 1982年3月

『中国語の環 第59号』

中国語の環編集室編 日本中国語検定協会

2002年4月

『中国21』Vol.18抜刷

愛知大学現代中国学会 2004年3月20日発行

『中日大辞典』と私 今泉潤一郎

インタビュアー 安部 悟

『愛知大学五十年史 通史編』抜刷

『中日大辞典』の編纂 今泉潤一郎

『生きていてよかった』

相田みつを著 ダイヤモンド社 1998年1月

以上